

## 調査報告

# 愛知県一宮市宝光寺の仏像調査

## —地蔵菩薩立像と十一面観音菩薩立像—

Investigation of Buddhist statues at Hōkōji Temple in Ichinomiya City, Aichi Prefecture

小野佳代\*  
Kayo ONO

キーワード：仏像 未指定文化財 地蔵菩薩 十一面観音

Key words : Buddhist statues, Undesignated cultural property, Jizō Bosatsu (Kṣitigarbha), Eleven-faced Kannon (Ekadaśamukhāvalokiteśvara)

## 要約

2021年9月30日、愛知県一宮市萩原町の宝光寺に伝わる地蔵菩薩立像と十一面観音菩薩立像の二躯の調査を実施した。この二躯の像は、これまで文化財としての価値を認められず、つまり未指定のまま伝来した仏像である。今回の調査で、両像ともに中世にさかのぼる古い時代の特徴をもつ像であることが明らかとなった。ともに宝光寺の歴史を語る上で重要な像であり、保護されるべき像であることを指摘した。

## abstract

On September 30, 2021, I investigated two statues, the Jizō Bosatsu statue and the Eleven-faced Kannon Bodhisattva statue, which are handed down at Hōkōji Temple in Hagiwara-cho, Ichinomiya City, Aichi Prefecture. These two statues have not been recognized for their values as cultural properties. In other words, they are Buddha statues that have been handed down without being designated. In this research, it was found that both statues have characteristics of old times dating back to the Middle Ages. I point out that both statues are important statues in the history of Hōkōji Temple and should be protected.

---

\* 東海学園大学人文学部人文学科

## はじめに

東海学園大学に2014年に着任して以後、愛知県の尾張地方の仏像調査を細々と開始した。その後、小牧市や春日井市の文化財保護審議会委員となり、両市に所在する寺院の文化財を視察・調査する機会を得た。そこで驚いたのは、古代や中世にさかのぼる優れた仏像が未指定のまま、その価値に気づかれずに伝来していたことであった。そこで科学研究費補助金・基盤研究(C)「愛知県尾張地方の仏像に関する総合的研究—中央との関係と地域性—」(2017-2021年)に応募した。採択後は、春日井市や小牧市のほか、犬山市や江南市、岩倉市、一宮市といった尾張地方の仏像を中心に本格的な調査を開始した。現在は、新たに基盤研究(C)「愛知県の仏像の特色に関する総合的な調査研究—技法の伝播や人の移動に注目して—」(2022-2025年)に応募・採択され、尾張地方にとどまらない愛知県の寺院に伝わる仏像の調査に取り組んでいる。

上記の科学研究費採択後、私が研究のために訪問した寺院は延べ100カ寺以上であり、調査した仏像も数百体にのぼる。現在では愛知県と岐阜県の文化財保護審議会委員となり、愛知県に限らず岐阜県の寺院調査も行っている。調査した仏像のうち、美術史的に重要な像や、地域の歴史を語るうえで重要な像である場合には市や県の指定文化財に推薦してきたが、中には諸事情により指定に至らないものもある。それは寺院側の事情によることもあるし、自治体側の事情によることもある。また保存状態が悪い、あるいは時代が近世以降である等の理由によって、指定には至らない場合もある。今後、未指定文化財については考えていかねばならない問題が多いと感じている。

愛知県では2023年4月より、県内の各自治体の指定には届かないが文化財として価値あるものを登録できる、愛知県文化財登録制度が始まる。現在、建造物においては国登録有形文化財があるが、それを県のレベルで行うもので、しかも市町村の指定文化財よりも縛りがなく、登録するも、登録をやめるも自由度が高い。こうした制度ができることで、これまで価値を見出されず、埋もれてきた未指定文化財を保存し、後世に伝えていければ何よりである。

このたび紹介するのは、令和3年(2021)9月30日に調査した一宮市の真言宗豊山派の寺院、宝光寺の地藏菩薩立像と十一面観音菩薩立像の二軀である。いずれも現時点で未指定の像であるが、調査した結果、中世にさかのぼる古い時代の特徴をもつ像であることが明らかとなった。宝光寺の本尊・釈迦如来立像は鎌倉時代末頃の像として、昭和55年(1980)に一宮市指定文化財となっている。そのため、これまでに専門家が宝光寺を何度も訪れているはずであるが、住職の玉置芳照師によると、本尊の釈迦如来像以外の仏像に注目した人はおらず、したがって住職自身も価値ある像とは知らなかったという。ここに、宝光寺の地藏菩薩立像と十一面観音菩薩立像の二軀を紹介したいと思う。



図1 宝光寺地蔵菩薩立像 全体



図2 宝光寺十一面観音菩薩立像 全体

## 一、宝光寺の概要

荒古山宝光寺は、愛知県一宮市萩原町萩原字寺裏 1148 番地に所在する真言宗豊山派の寺院である。本堂の須弥壇上の中央に厨子があり、その中に像高 78.5cm の釈迦如来立像が本尊として祀られている。その右（向かって左）の小型の厨子内には地藏菩薩立像、その左（向かって右）の小型の厨子内には十一面観音菩薩立像がそれぞれ安置されている。

寺伝によると<sup>(1)</sup>、宝光寺は澄栄上人を開山とし、かつては十六棟の伽藍坊舎が建ち並ぶほどの寺院であったという。創建時は今の場所から約二丁（約 218m）東の寺屋敷という地にあったが、度かさなる木曽川の氾濫や地変のために壊滅状態となったのを、良慧法師（永禄年中〈1558～70 年〉の人、元亀元年〈1570〉1 月 15 日寂）が織田信長の寄進を受けて真言密教の道場として改宗のうえ中興したという。さらに第四世法印慶譽が同村稻荷神社へ願い出て現在の地に移転したものと伝えられる。寺屋敷には墓地が現存し、鎌倉時代のもと思われる宝篋印塔<sup>ほうきょう</sup>の破片が残り、澄栄上人の名が記されているという（以上、寺伝）。また境内には、九世秀向師（天保 11 年〈1840〉6 月 8 日寂）の名を刻んだ宝篋印塔が残っている。

以上、宝光寺は鎌倉時代の澄栄上人を開山として創建された寺院であり、永禄年中に良慧法師が宗派を真言宗に改宗し、寺院を中興したと伝えられる。ただし、改宗以前の宗派は古い資料が現存しないため不明である。現在、宝光寺では中興開山の良慧法師を初代住職とし、初代から数えて 21 世の玉置芳照師が住職を務めている。

## 二、地藏菩薩立像の調査

木造 漆箔<sup>しつぱく</sup> 1 軀 像高 31.4cm

〔形状〕

円頂。白毫相<sup>びやくごう</sup>をあらわす。耳朶不環<sup>じだ</sup>。三道相<sup>さんどう</sup>をあらわす。內衣・裙<sup>ないえ</sup>（巻きスカート）・覆肩衣<sup>ふけんえ</sup>・袈裟<sup>けさ</sup>を着ける。內衣は胸前で右衽<sup>うじん</sup>（右の衽<sup>おくみ</sup>〈前身頃<sup>まえみごろ</sup>に縫いつける細長い布）を内側に入れ込む）に打ち合わせる。覆肩衣は背部から右肩にかかり右腕をおおい、右脇腹で袈裟に一度たくし込まれる（右腕内側袖が外側に比べて長い）。袈裟は左肩から背部をめぐり右腋下を通過して正面にまわり、縁を大きく折り返し、左胸前で紐<sup>ひも</sup>で吊り、左前膊<sup>ぜんぼく</sup>（肘から手首まで）にかける。裙は正面右方で右前に打ち合わせるか。両手屈臂<sup>くつび</sup>。左手は掌<sup>たなごころ</sup>を仰いで五指を伸ばして宝珠を載せる。右手は掌を内側に向けて全指を曲げて錫杖<sup>しやくじょう</sup>を握る。左足をやや前に踏出して立つ。

〔法量〕（単位cm）

像 高 31.4（一尺）

頂一顎 5.1 面 幅 3.2

耳 張 4.1 面 奥 4.1

胸 奥	4.0	腹 奥	5.3
肘 張	10.2	裙裾張	7.6

### 〔品質構造〕

檜<sup>わりは</sup>。割矧ぎ造り。漆箔<sup>しつぱく</sup>。白毫水晶<sup>かんにゅう</sup>嵌入。

頭体幹部は一材から彫出し、両耳の後ろを通る線で前後に割矧ぎ（割って接合する）、内刳りのうえ、内衣の襟にそって頭・体<sup>わりはな</sup>を割放す。頭部はさらに面部でも矧ぐ。両肩以下、左右の体側部に各別材を矧ぎ付ける。さらに左右前膊とそれにかかる袖を矧ぎ、両手首先を各挿<sup>さしこ</sup>込み矧ぎとする。両足先に別材を矧ぐ。現状では両足踵裏<sup>かかと</sup>に木製釘状の柄<sup>ほぞ</sup>を挿して立てる。

表面は漆箔仕上げ。

### 〔保存状態〕

表面漆箔の上に塵<sup>ちり</sup>や煤<sup>すす</sup>等が付着し黒色を帯びる。所々に漆箔が見えており、漆箔が剥がれて素地が見える箇所もある。左右袖先、左足先、以上亡失。右耳、両手首先、右足先、釘状柄、以上後補。左耳、左右前膊にかかる袖先の一部、表面漆箔層も後補か。

光背（蓮弁形拳身光。木製、漆箔）・台座（蓮華座。木製、彩色・漆箔）、各後補。光背裏に「示<sup>示</sup>後光立像一尺」の墨書がある。

### 〔考察〕

宝光寺地藏菩薩立像は、檜の割矧ぎ造りの技法によって彫出された、像高31.4cm、彫眼<sup>ちようがん</sup>、漆箔仕上げの小像である。本像の製作年代については、小ぶりな目鼻口でやさしい表情、なで肩のプロポーシオン、像底の形などから平安時代後期作の印象を受けるが、一方で内衣を右衽に打ち合わせて吊袷<sup>つりけ</sup>姿<sup>さ</sup>をまとう点、左前膊<sup>ぜんぼく</sup>の外側にかかる袖の皺が写実的である点、また側面観に厚みが出てきている点など鎌倉時代の特徴も看取される。とくに覆肩衣の右腕内側の袖が外側より長い点は特徴的である。武笠朗氏によると<sup>(2)</sup>僧祇支（覆肩衣）の内側袖を外側より長くする表現は、寿永三年（1184）の栃木・住林寺の地藏菩薩立像に見られるのが早い例であるとし、中尊寺金色堂の西南壇の地藏菩薩立像にも見られるという。平安時代の終わりに出てきた新しい表現であったと考えられる。以上を踏まえ、本像の製作年代は平安時代から鎌倉時代への過渡期にありながらも、新しい時代への指向が認められることから鎌倉時代初期（12世紀末～13世紀初）の作と推定したい。

また、本像の像底踵裏の柄は後補で、古い足柄の痕跡はみられなかった。山本勉氏（鎌倉国宝館長／清泉女子大学名誉教授／東京国立博物館名誉館員）の教示によると、小像の場合、幹部材から足柄を造り出すには足裏部分が少なすぎるため、像底中央部に柄を設けた可能性があるとい

う。あらためて像底を注視したところ、像底中央部に柄のあった痕跡（柄孔を補材で填めたか）が認められた。

以上、述べてきたように、本像は製作年代において、宝光寺本尊の釈迦如来立像（鎌倉時代末頃、一宮市指定文化財）よりもさかのぼる鎌倉時代初期の像と推定できた。本像の発願者や造立事情は不明ながら、宝光寺が隆盛した時代の仏像と考えられる。小像ゆえに、今後、保護しなければ失われてしまうことも危惧される。市の指定や、指定に至らない場合には、冒頭でのべた愛知県登録有形文化財が検討されてもよいだろう。

### 三、十一面観音菩薩立像の調査

木造 金泥塗り・漆箔 玉眼 1 軀 像高 54.0cm

#### 〔形状〕

垂髻<sup>すいけい</sup>。環状の髪束を地髪部の四方に垂らす。頭髪は、髻<sup>もとどり</sup>と天冠台より上の地髪部は平彫り、天冠台より下は束ね目入り毛筋彫りとする。髻髪一束<sup>びんぼう</sup>耳をわたる。天冠台は帯状にあらわす。髻頂に仏面、髻の環状髪束の中に四面（菩薩面一、狗牙上出面一、瞋怒面二）、地髪上に六面（菩薩面一、瞋怒面一、狗牙上出面二、欠失二）を戴く。仏面は縄状（波状）の頭髪とし、その他の変化面は単髻に花冠を付ける。さらに地髪部正面中央に化仏立像<sup>けぶつ</sup>を置く。白毫相をあらわす。耳朶環状。左肩から条帛<sup>じょうはく</sup>を懸ける。天衣は背部から両肩をおおって肘内側に垂れたのち、肘外側に輪を作って垂下する。裙と腰布を着け、いずれも腰で折返す。腰布の上、裙折返し部の下に、幅の広い帯状の布（左右の腰部のみにあらわされる）をまとう。左手は屈臂して水瓶<sup>すいびょう</sup>を執り、右手は垂下して掌を前に向けて五指を伸ばす。右足を少し前に出し、右足第一指をわずかに上げて蓮華座上に立つ。

#### 〔法量〕（単位cm）

像 高 54.0（一尺七寸八分）

髪際高 45.3（一尺四寸九分）

頭一顎	14.0	面 長	5.2
面 幅	5.7	耳 張	7.0
面 奥	7.0	胸 奥	8.2
腹 奥	8.5	肘 張	16.0
裾 張	12.0	足先開	9.0

#### 〔品質構造〕

檜。割矧ぎ造りか。漆箔・金泥塗り・彩色・切金<sup>きりかね</sup>。白毫水晶嵌入。玉眼嵌入。宝冠および付属

する左右装飾（垂飾付き）・冠繪、瓔珞付き胸飾、以上銅製、鍍金。

像表面の金色相が厚く判然としない箇所もあるが、次のように推測される。頭体幹部は一材から彫出し、両耳前を通る線で前後に割矧ぎ、内削りをほどこして割首する。髻・頭上面各別材矧ぎ。両腕は各肩・肘に別材を矧ぐか。両足先に各別材を矧ぐ。足柄は左右とも足裏に別材を差込むか。天衣遊離部は別材。天衣垂下部を肘外側で鋳留めする。

表面は、頭髮を群青で彩色し、髮際に沿って緑青（現状、黒色）の輪郭線を入れる。

肉身部は丹下地金泥塗り。髮際正面から左右に各二条の毛を墨描きし、さらに眉や口髭・顎髭を墨で描く。玉眼は瞳を黒であらわし朱で縁取る。白眼白。唇は朱彩。

着衣部は、後補の漆箔層の上に下記の切金文様をあらわす。

条帛は四ツ目菱入り七宝繫ぎ文、縁に線二条。天衣は麻の葉文、縁に線二条。裙は麻の葉繫ぎの地文に菊花丸文散らし。縁は蓮華文。裙の折返し部表は卍繫ぎ文、縁は線二条。同部裏は八ツ目菱入り変わり斜格子文。腰布は籠目文、周縁部は内側を太線一条、外側を細線二条で区切り、縁に縦線文をめぐらす。腰布の折返し部は卍繫ぎ文、縁は雷文。腰帯は波状文、縁は線二条。

#### 〔保存状態〕

頂上面のうち二面を欠失。現状、髻の環状髪束中、正面右の瞋怒面一つは当初、地髪上後方左にあったものか。左手第四・五指の半ばより先、水瓶の下半部、天衣左垂下部を亡失。右手の掌に釘が残る（数珠と錫杖を持っていたか）。

漆箔、切金文様、光背（拳身光。二重円相・光脚・周縁。木製、漆箔）・台座（蓮華座。木製、漆箔）、以上後補。

#### 〔考察〕

宝光寺十一面観音菩薩立像は、檜の割矧ぎ造りと推定される技法で彫出された、像高 54.0cm、玉眼、肉身部金泥塗り、着衣部漆箔の上に切金文様を施した、やや小ぶりの像である。ただし着衣部の漆箔および切金文様は後世の処置である。当初は着衣部漆箔の像であったと思われるが、後世の修理時に漆箔をやり替えた際、切金文様が置かれたのであろうか。

本像は顔立ちが端正で、体躯のバランスもよく、鎌倉時代の雰囲気を残しながらも、頭部や頭髮などには南北朝時代から室町時代の特徴もみられる。以上から、本像は南北朝時代後半から室町時代初期にかけての頃、すなわち 14 世紀後半から 15 世紀前半頃の作と推定したい。伝来は不明ながら、地方色を感じさせない美しい像である。

また、本像の右手掌には、先述のように釘で何かを留めていた痕跡があるのは注目される。宝光寺の本山が奈良の長谷寺であり、世に名高い長谷観音（右手に錫杖をもつ十一面観音立像）を本尊としていることに鑑みるならば、本像も同様に右手に錫杖をもつ長谷寺式観音像であった可能性



が高い。右手掌の釘は錫杖を留めていた痕跡であろう。数珠を併せもっていた可能性もあろう。

宝光寺は先述のように、鎌倉時代に創建された寺院であるが、室町時代の末、永禄年間に良慧法師が寺院を改宗、中興したと伝えられる。中興した後、すでに所蔵していた古い十一面観音菩薩立像の手に錫杖を持たせて長谷寺式にしたのではないだろうか。それは宝光寺が奈良の長谷寺を本山とする真言宗豊山派となったことを象徴することでもあったろう。その際に台座と光背が新調され、着衣部の漆箔をやり替え、新たに切金文様が施されたと思われる。

つまり、本像は宝光寺の歴史を語る上で重要な像といえるだろう。また像の推定年代も南北朝時代後半から室町時代初期（14世紀後半から15世紀前半頃）と古く、貴重である。本像もまた保護され、後世に伝えていくことが望まれる。

## おわりに

2021年9月30日、一宮市の宝光寺を訪問し、本尊の釈迦如来立像の両脇に安置される地藏菩薩立像と十一面観音菩薩立像の調査を実施した。宝光寺の本尊釈迦如来立像は鎌倉時代末頃の像としてすでに一宮市の文化財に指定されているが、それ以外の像は未調査で、詳細が知られていなかった。しかしこのたびの調査で、地藏菩薩立像と十一面観音菩薩立像の二躯がそれぞれ鎌倉時代初期、南北朝時代後期から室町時代初期の像と推定できた。とくに地藏菩薩立像は像高31.4cmと小像であるうえ、保存状況も良いとはいえないため、後世に伝えていくには修理の必要な時期にきている。

他の寺院でも同じことがいえるが、時代の古い像が未指定の場合、その価値に気づかれずに朽ちていく危険をはらんでいる。檀家がない、または少ない寺院であればなおさらのこと、修理費を捻出することができない。さらに、寺院の後継者問題もある。住職が高齢である場合、後継者の有無によって文化財指定が躊躇される場合もある。問題は多岐にわたっている。しかし、現在私にできるのは、愛知県や岐阜県内の寺院を訪れ、未指定の仏像を調査し、仏像に価値を見出し、寺院の要望に応じつつ文化財指定にしていくなど、保護に向けた働きかけをしていくことである。地道な活動ではあるが、今後も続けていきたい。

## 〔注〕

- (1) 宝光寺訪問時に住職の玉置芳照師よりいただいた寺院説明文による。
- (2) 武笠朗「付論十一・十二世紀の地藏菩薩造像と金色堂像」(東北大学科学研究費補助金研究成果報告書『中尊寺を中心とする奥州藤原文化圏の宗教彫像に関する調査研究』所収、2003年)。



图3 地藏菩薩立像 正面



图4 地藏菩薩立像 背面



图5 地藏菩薩立像 右側面



图6 地藏菩薩立像 左側面



図7 地藏菩薩立像 頭部正面



図8 地藏菩薩立像 頭部背面



図9 地藏菩薩立像 頭部右側面

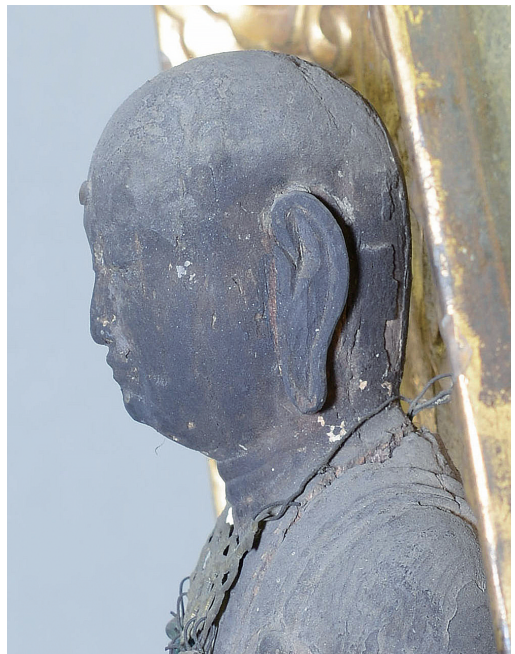


図10 地藏菩薩立像 頭部左側面



図 11 地藏菩薩立像 像底

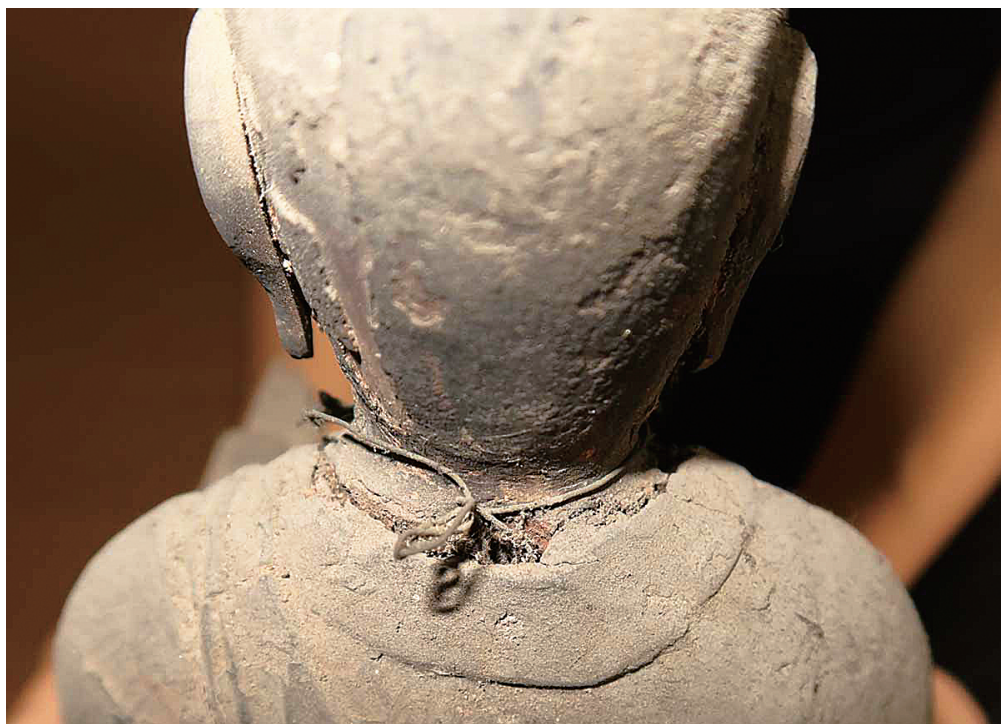


図 12 地藏菩薩立像 背面 (部分)



図 13 十一面観音菩薩立像 全身正面



図 14 十一面観音菩薩立像 右斜側面



図 15 十一面観音菩薩立像 左斜側面

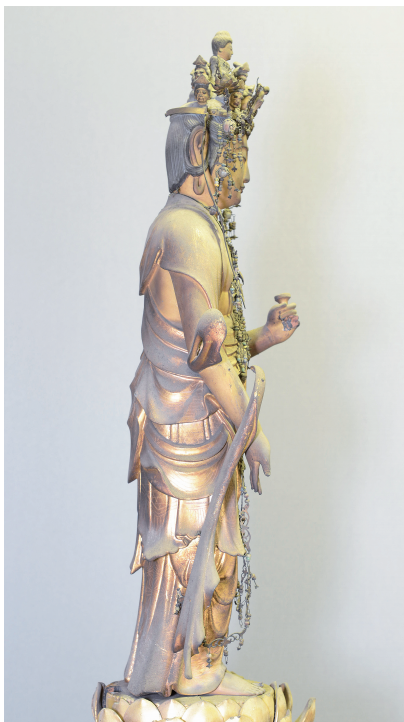


図 16 十一面観音菩薩立像 右側面



図 17 十一面観音菩薩立像 背面



図 18 十一面観音菩薩立像 頭部正面



図 19 十一面観音菩薩立像 頭部背面



図 20 十一面観音菩薩立像 頭部右側面



図 21 十一面観音菩薩立像 頭部左側面



図 22 十一面観音菩薩立像 像底

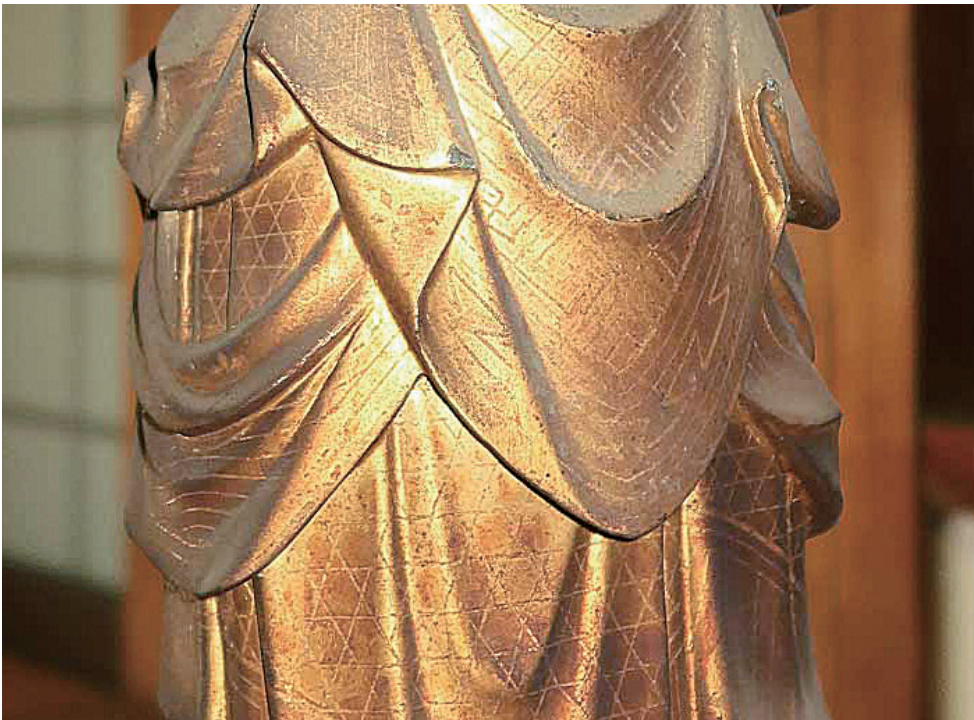


図 23 十一面観音菩薩立像 切金文様